



ぬくもり

[平成24年10月15日発行]

輝く人とまち 人 つながる可見 —「参画」と「協働」による“市民中心のまちづくり”

祝 機関紙「ぬくもり」創刊50号

16年間 (発行:年3回)

みなさまのおかげです!

きいとくん まゆちゃん

機関紙「ぬくもり」と「子どもの人権史」

平成8年 平成24年

機関紙の歴史

9月1日発行

継続は力なり
持続こそ光なり
(本センター編集モットー)

本号
50号
(10月15日発行)

★「子ども110番の家」発足(全国初)
(平成8年3月)

守りは大人の手で

★「可児市いじめ防止専門委員会」設立(第三者機関)
(全国先駆)
(平成24年5月)

可児市
子どもの人権史

創刊50号記念「特別寄稿」
創刊50号に寄せて

可児市長 富田 成輝

この度の機関紙「ぬくもり」50号の発行、心からお喜び申し上げます。16年間の永きにわたり「人権のありよう」等の紙面作りに携わってくださった方々に敬意を表します。人権は「人間が人間らしく幸せに生きていくための権利」といわれています。人は、社会の中で生きています。勝手な間違った決め付けでの差別や偏見でいじめられることにより、傷つき人間らしい生活と大切な人生が幸せでなくなることもあります。私は、2年間の海外生活を通して、いろいろな経験をしました。海外では、少数派となり上手に通じない言葉や文化、習慣の違いなどから差別をされる側になるといふ貴重な経験もしました。日本にも世界にも文化を大事にしてきたマイノリティの方がいます。また世の中が、グローバルな社会となり多くの外国籍市民が住むこととなります。だれがどこにいても人としての権利が守れる安寧で幸せな、心豊かなまちづくりに力を注ぐ決意をしております。

その一つとして、いじめをなくす約を掲げ「可児市いじめ防止専門委員会」を設立しました。また「子どもいじめ防止条例」を10月には制定し、他市に先駆けて推進しております。

最後に、貴センターの益々のご発展と皆さまのご活躍とご健勝をお祈り申し上げます。

● 目次 ●

- 平成24年前期活動の報告と後期活動のお知らせ ②
- 特集コーナー「そばにある人権」について② ③
- コーナー ④
 - 会長あいさつ ● ある日その時
 - 可児ぬくもりネットだより ● ぬくもりまゆちゃん⑩ ● 他

6月号(49号)にて、首題の意義とその提言・現況につき解説しました。今回は、特に転居の多くなった若い人への具体的な提言としました。

主旨

①核家族化が進む現在、そこが永久の住まいでなくても、声かけ知りあうことは大切なことです。

②「遠い親戚より近くの他人」ということわざが昔からありますが赤の他人であっても、自分の近くに住んでいる人の方がいざという(災害・高齢・子ども育児等)時には、頼りになると言うことです。

③広い日本の中にありながら同じ地域に住むということは、「奇(く)しき縁(えにし)」であり、隣同士に住む深い縁を感じながらキーワードである「支え合い・気づき合い・分かち合い」の発揮こそ大切なことだと思います。

④「普遍的な人権とは、どこからはじまるのでしょうか。じつは家の周囲など小さな場所からなのです。あまり身近すぎて世界地図にはのっていません。ご近所の人等、個人個人の世界こそ、はじまりの場なのです」(要旨)

(「世界人権宣言」起草者の一人：エレノア・ルーズベルト)

⑤ここで「23年度300字小説の最優秀賞」の作品を紹介します。隣人の関係等での「対話の大事さ」を感じてほしいと思います。

(平成23年度 本センター 300字小説入賞作品)

その国の国王には息子が一人だけいた。国王は当然その子が次の国王になると信じて、小さい時から大金をかけて教育をした。ところがその子は十五才の時、突然「パン屋になって、人々を幸せにしたい。」と言いました。国王は怒って「お前が国を継がなければ、国がつぶれてしまう。」と許さなかった。とうとう息子は国王と絶縁し自分の夢だったパン屋になった。ある時、隣の国と争いになり戦争が始まった。しかしパン屋になった息子は戦争には行かず毎日パンを焼き、敵国の兵士達にも配り続けた。敵国は感動し、やがて戦争は終わった。パン屋になった息子は国王に言った。

「力だけでは国を守ることはできないよ。」

佐藤那奈 (中学校三年生：当時)



<近隣への日常の心得> ～若い人へのアドバイス～

- 1、極端な言葉と言い返し言葉・無理な言いあいはいししない。(分かち合い)
不都合なことが発生した場合、第三者へ話し、一般的な話題にしてなるべく公対処で解決してもらう。
- 2、小さい親切を普段から心がける。(野菜のやり取り・お土産等) (支え合い・分かち合い)
- 3、声掛けを多くする。(天気・健康具合・近くの行事・子どものこと等) (気づき合い)
- 4、建築・改築の場合は、向こう三軒両隣+特に裏の家の挨拶は通常として行うこと。
(気づき合い)
- 5、苦手な性格な人でも、話すと皆よい人となります。(個性だからです) (分かち合い)

- ★似たことを知らないうちに自分もやっているかも？
何があっても「行為を憎んで人は憎まず」誰にでもあること！かな？と思うことです。
- ★仲良くなれば気にならなくなるものです。最初が肝心です。

オレンジの季節



「オレンジリボン運動」を始めた人たちの心
 ・オレンジリボンマークは子どもの虐待防止のシンボルです。11月は防止推進月間です。
 ・子どもの虐待相談件数は約6万件(児童相談所23年度)です。

「子どもは、社会の宝です。」「子どもの生きる権利」を守るのは大人の皆さんです！
 ・早期発見と悩む親さんへの援助(声かけ)をお願いします！

★(その1)「オレンジリボン運動の起源について」
 2004年栃木県小山市で3歳と4歳の兄弟が父親の友人から暴行を受け、最後は橋の上から川に投げ込まれて幼い命を奪われた。こうした痛ましい事件をきっかけにして、小山市の「カンガールOYAMA」という団体がこの運動を始めたのです。

★(その2)「自分の子どもだから何をしてもいい」「子どもを自由にする権利」はないのか？
 ・刑法で処罰されます。暴力・保護放棄(食事不与・栄養不良管理・病気不良管理・衣類不潔管理・長時間の泣かせ・戸外締めだし・繰り返ししりしり・兄弟差別等)養育義務違反(行為等)

★(主張)
 ・暴力・暴言はしつこくではありません！(泣く・通い・言い合いを聞かないは、体力・理解不足等からくる子どもの自己防衛の自然な姿です)親のあなたが反省することです！(成長に構えてよいのは、普段が大事で、子どもの心と命を尊重した行動であるかを見つめ直すことが大切です)

・親も感情の起伏があることも当然です。強度の精神的イライラが起これば、続けていたら一人で悩まないで左記に相談下さい。

【連絡先】

中瀬子ども相談センター 020-7030000
 岐阜県中央子ども相談センター
 057-700-0000(フリーダイヤル)

(編集)



ぬくもりまゆちゃん10

としき
 <年月はあつという間だね!>

作:多々/画:miho



(本作品は、全て本職員でつくられています)

心の響き

(本センターホームページ)

可児ぬくもりネット だより

(今週のビタミンから)

今日は、「サンキューの日」

今週のビタミン 投稿日:2012年3月9日編

「感謝の念こそ 幸福の安全弁で大切なり」

(松下幸之助著「一日一語より」)

今朝、出勤中の車のラジオで3月9日の今日は「サンキューの日」であると放送していた。

番組での「ありがとう」の言葉の投書の中に、先立たれた妻への感謝の綴りがあり、この投書の最後には、漢字の「有難う」の同じ言葉が数回も綴ってあったとのこと。平仮名では、意味の深さははかれなくても漢字では分かる。

おそらく「仕事・仕事と精を出しその助けも特と評価せず、稼いでいることだから自分を助けることは当たり前前と思いつつも、この先にゆっくりとしようと思つている」のが普通の親爺達の感慨である。

この矢先に妻に先立たれ「こうしてあげておけば、こう言つてあげておけば良かった。」との後悔の中、綴った感謝の文中、たつた一言の「ありがとう」

の言葉に自分と共に苦労を重ねてくれた(困難が有つたのに...)この人の感謝を、漢字の「有難う」におそらく込めたいに違いない。

物事が生まれては消えていく、この人生にあつて「筋縄に行く事などありはしないものである。当たり前・当然・常識と言へることは、金銭の取引以外には、ないものである。

全て変化の中にあり同じ事などないからである。だから、それぞれの人がそのことに共に命を削つてやっているのだから感謝なのである。

人との関係につき福沢諭吉は、「世の中で一番美しいことは、全てのことにある(感謝)をもつことである(また逆に「世の中で一番尊いことは、人のためにやつても決して恩に着せない」ことである。(大要)と、なぞらえている。あの中村雅俊「ふれあい」の曲にある「人はみな一人では生きていけないものだから」とおり、人は、皆多くの人に支えられて生きていることへの感謝が分かつた時、人生うまくバランスがとれることに気づくのである。

今週の「ぬくもり」

会長 杉山 桂

本紙への皆様からの多くのご協力に心より感謝申し上げます。
 お陰さまで、16年間継続することができ、この度50号となりました。
 今後とも、全戸配布を通して、ご拝読願ひご指導ご鞭撻の程お願ひ申し上げます。

編集後記(啓業のひかり)

「この道や行く人なしに秋の暮れ」という芭蕉の晩年の句があります。だれもが、晩年を思うと旅人に似ています。今が、生涯をかけてきたものかどうかを、秋の暮の静寂な思いの中で、ふと立ち止まり考えます。

最終章は大事な時、多くの縁あつての人びととの生き合いと恩返しを大切にしたいもの、あの道もこの道もその人にとって大事なこと。ゆつたりとした「行く人なしの道」にもきつとリンドウの花や小さく咲く路傍の花が咲き語っていることでしょうか。そこには愛でながらゆく自分史の一幅の名画があるように思ひます。組織も同じで、過去の歴史を大事にしながら、新たな歴史づくりが求められます。人のぬくもりの心が少しでも広がるようにと、継続は力なり「持続こそ光なり」をモットーに推進してまいりました。

本機関紙も歴代の編集者のお陰で、「こころ」50号をお届けできました。今後みなさまの愛をお願ひ申し上げます。

(編集者:川手晴猛)